第九回留学報告書

Funai Overseas Scholarship 2020 年度奨学生
古賀樹

2024 年 12 月

2020 年度から University of California San Diego の Computer Science 専攻 Ph.D. 課程に在籍している古賀樹と申します。この報告書では博士課程 4 年目の冬・春学期についてご報告させていただきます。

1　研究

4 月にカナダのトロント大で行われた IEEE Conference on Secure and Trustworthy Machine Learning (SaTML) に参加し、採択された論文を発表しました（内容は過去レポートを参照ください）。発表は YouTube（`https://youtu.be/5YSnp9Er8Q8`）に上がっているので、興味がある方はぜひご覧ください。これまで参加してきた学会は参加者が一万人を超えるような大規模なものでしたが、この学会は新しいということもあり比較的小規模でした。その分参加者とより深いコミュニケーションをとることができました。特に同世代の博士学生との交流が多く、横の繋がりが増えたことをとても嬉しく思うと同時に刺激をもらうこともできました。

図 1: 発表の様子

5 月には Thesis Proposal を行いました。Defense の前の最後の要件となっていて、これまでの研究と残り期間で何をするかを発表しました。無事コミッティーから合格をいただいたので、卒業へのカウントダウンが正式に始まりました。これまではあまり深く意識せず興味の赴くままに研究をしてきましたが、Thesis Proposal はこれまでの自分の研究を大局的に見る良い機会になりました。自分のこれまでの研究は「プライバシー保護下でのデータ解析」と大きく括られます。その括りの中で、私は博士課程の間（1）プライバシーが必要とされる設定の探索、（2）適切なプライバシーの定義、（3）プライバシーの定義を満たすアルゴリズムのデザイン、を一貫して行ってきました。どうしても一般に（3）に関する研究が多くなる傾向がありますが、個人的にはこの三つ全てが揃うことがとても重要だと考えています。もちろん一つ一つの研究によってそれぞれの比重は異なりますが、振り返ってみると博士課程を通じてこの三つを遂行する力をバランスよく付けることができました。そしてこれが博士課程を経て獲得した自分の強み・専門性ということになるのだと思います。この強みを今後のキャリア形成に活かしていければと思います。

2　TA

冬・春学期には TA も行いました。冬学期は自分も履修済みの Convex Optimization の授業、春学期は同じ教授が担当する Numerical Optimization の授業でした。正直なところ意欲的な学生は多くなく、TA の業務のほとんどが宿題のヒントを与えることだったため、非常に退屈な時間を過ごすことになりました。TA を通して、自分が人に何かを教えることに喜びを感じるのかを考えてみましたが、教えるという行為自体に楽しみを見出すことは難しい、というのが今のところの結論です。もちろんスキルセットとして何かを教える・伝える能力は非常に重要なので、その訓練は今後もしていきたいですが、それ自体に楽しみを見出すことはせず、そのスキルを高めた結果の目標の達成に喜びを見出していこうと思います。このトピックに関してはぜひ他の方々の意見も聞いてみたいものです。

3　最後に

Ph.D. 生活 4 年目後半は卒業も見えてきて、次のキャリアについて深く考えながら、充実した毎日を過ごすことができました。改めてこの場を借りて様々な面での支援をしてくださっている財団の皆様に心よりお礼を申し上げます。